

ひきセン通信 2019 第2号

ひきセン通信は新潟市ひきこもり相談支援センターが発行する不定期刊行物です

中高年ひきこもり六十一万人

内閣府は今年、半年以上にわたり家族以外とほとんど交流せず、自宅にいる40歳以上と64歳のひきこもりの人が全国に61万3千人いるとの推計値を公表しました。この内男性が76.6%でひきこもりになったきっかけは退職が最も多く、就職氷河期を経験したことなども背景にみられ、7年以上ひきこもっている人が半数以上を占める結果から、ひきこもりの長期化、高齢化が裏付けられていると言えます。

これ迄「ひきこもり」というと、ニートという言葉と同じように若者が対象のイメージが強かったのですが、現実では親が80代、子が50代という「8050問題」が大きくクローズアップされ、ひきこもりは若者特有の現象ではないということが言えます。

「新潟市ひきこもり相談支援センター」を利用する方も若年層ばかりではなく40代、50代の人も利用しています。

団塊ジュニアを含む40代以上はバブル崩壊後の就職氷河期を経験した人もいます。思うように仕事が見つからなかったり対人関係で躓いたり、辛い経験をした人もいます。

支援内容は就労や各機関に繋ぐだけにとどまらず、ひきこもりが長期化すると同居している親も高齢化し、病气や介護、経済的困窮といった問題も出てきて当事者だけの支援では解決しないケースも増えてきました。ひきこもりの原因は様々で「生きづらさ」の原因は今の社会にもあるのではないかと考えます。

私たち相談員は「生きづらさ」を感じながらも「生きている」当事者の人たちの側に立って支援することの必要性を一層感じている所です。そして社会とながる糸口となれますようにと日々面談、訪問などの支援をしています。本人、本人の家族からの相談も受けていますので、まずは電話で面談予約をされて、当センターへお越しください。

『女性の居場所』紹介

当センターでは昨年11月から月1回「女性の居場所」を開催しています。ここ最近、当センターには女性の利用者さんが増えてきました。家事手伝い、家族の介護など家での仕事をしている人の中にもひきこもっている人が一定数存在していて、社会と繋がっていない人がいることも一因かもしれません。女性の利用者さんの年齢層、問題の共有が同性の方が話しやすい人もいることから通常の居場所（水曜の午後2時から）とは別に、「女性の居場所」を開催するに至りました。現在は4〜6名の参加があります。お菓子作りが得意な人は自作のケーキを持って来たり、手芸の好きな人はチクチク針を動かしながら皆さんの話を聴いている人もいます。会に何を求めるかは参加している人1人1人違って良いのです。来ることで人となりが悩みを共有したりすることが出来ます。自分を認めてもらったり他者を認めたりする優しい空気が流れています。興味のある人、ぜひ参加をお待ちしています。

開催予定日

9月25日（水）・10月23日（水）

いずれも10時〜12時

（文責 矢尾板）

父の投稿

「その一言が言えなくて」 No.2

それからは一進一退の毎日、当たらず触らずまるではれ物にも触るような対応です。

息の詰まる生活が続き、もう限界に達しました。

ついに出た、「お前これからどうするつもりなんだヨ」

怪獣「あんたなんかには関係ないし」

「あんたなんか親とも、まして親父なんて思っていないし」

なんだよ、そのいいぐさは、あまりの口惜しさと情けなさで言葉も、手も何もでませんでした。

それはないでしょう、少なくともこれまで育ててくれた恩義はあるものでしょう。「野良犬でも三日飼えば恩を忘れないと言うのに、まして30年近く育てたのに親じゃないのか・・・」

これも怪獣が言わせた言葉であろうか、だとしても言っただけのことと悪いことはあるはず。その一言がどれだけ人を傷つけたかを知っているのだろうか。

確かに、子どもは親も家も生まれてくる場所さえ選べない。が、生まれたからにはどんな環境だろうが精いっぱい生き、親には感謝すべきものと昭和の親父は思う！

俺は戦後の本当にないもない貧しい時に生まれ、食べるものもろくになかった。小学校の給食が楽しみで学校に通ったほど。

何もないけど「イジメ」も「不登校」もなくその言葉さえもなかったと思う。

今の時代は豊かでなんでもあつて。手を伸ばせば手が届きるところに欲しいものがあるけど何か足りない。心が貧しくなっているのでは。

古臭いことを言うなよ、今は時代が違うから。

アナログの親父に何がわかるんだヨと言われそう。

「怪獣」との戦いにも疲れ果て、体力も気力も衰え還暦も過ぎたころに、一分の望みをかけて、「俺の仕事を手伝ってくれないかい」と頼んでみた。

「関係ないネー」「何で俺が手伝わなきゃダメなんだヨ」「俺、知るか」。

またもや、裏切られ、失望し、半ばどうでもいいかなあ、俺自身も「やけくそ」になった。もう勝手にしろ。家族はバラバラ「家族愛」「絆」そんなもの映画かテレビドラマの中の話で我が家には無縁のことのように思えた。

そんな気持ちに陥っていた時である人からひきこもり相談支援センターのことを聞き、もう地獄に仏のとはこのことかと藁をもつかむ思いで相談に行きました。

センターのことを聞き、もう地獄に仏のとはこのことかと藁をもつかむ思いで相談に行きました。

「ひきセン」のスタッフの皆さんは親切で親身になってくれました。

俺の家まで何度も足を運び「怪獣」と接触し、なおも説得し外に出られるようにしてくれました。

俺は昔、「怪獣」との戦いにおいて暴力で2階から引きずり出しましたが結果は失敗でした。

しかしひきセンは戦わずして「怪獣」を2階から出しました。

暴力では何も解決できないことをしりました。「ひきセンは凄いなー」と思いました。

きつと「ひきセン」には怪獣をやっつける秘密兵器があり、「あなたもできちゃう光線」を出したのかも知れません。

（匿名）